アジスキタカヒコネと建国神

――原ヤマトタケル伝承と四・五世紀史序説――

大内建彦

1　ヤマタノヲロチ神話の原像

このヤマタノヲロチ神話は、日本神話のうちでも、海幸山幸神話とともに最も多く研究がつみ重ねられてきた代表格に属すといえよう。このヲロチ神話は、近代以降に限っても、早くE・S・ハートランドによって広く世界にみられる、いわゆるペルセウス・アンドロメダ型神話の一類型とされ、以後、松村武雄、大林太良など多くの神話研究者によって支持されるところとなり、今日に至っている(1)。この話型に関しては、広い意味で伝播説が有力であるかにみえるものの、自生説、あるいは自生説プラス伝播による付加要素を認める混合説まで多様であり、未だはっきりとは決着をみていない。伝播系統論にたつ大林太良はヲロチ神話中の神剣要素を重視し、隣接諸民族の類例の分析を通じて、この神話が鉄剣文化の流入にともない、中国江南から南朝鮮を経てわが国にもたらされたとみる具体的な系統論を展開した(2)。妥当な見解として首肯しうるものと考える。

ところで、この周く知られるヲロチ型神話が、更に昔話のレヴェルにまで比較資料が押し広げられるにいたり、この話型は文化差歴史差に関係なく、汎世界的に濃密に分布するものとみなされるに至った(3)。こうした過程で、時間的空間的制約からときはなたれて、広く比較研究への道が開かれてきた一方で、そのあおりをうけて、この古代神話としてのヲロチ神話はかえって、解明さるべき重要な問題点を拡散させてしまったかにみえる。神話の背後にひそむその形成のプロセスと、それとパラレルにある固有の歴史的意義の解明や跡づけが、巨視的で無時間的な比較研究のかなたに置き忘れられてきたからであ

る。古代神話に固有の語りの構造そのものが問われることなく、伝承一般に還元解消された諸要素が、ただ横ならびに比較されるにまかされてきたのである。この神話のヒーローたるスサノヲと、神話上ペアーをなすアマテラスとが、体系神話内へと参入したのは最も新しく、記紀成立の最終段階においてであることはほぼ定説化しているといっていい。とすれば、この神話の主人公たるスサノヲ自身にしてからが、より本来的にその位置にあったかどうかという点をも含めて、根底的な問を発することから考察を始めるべきであろう。そうしたラディカルな問いかけが久しくなされないまま、この神話に関する本格的な研究は目下たなざらしの状況にある。

そうした意味で改めて注目すべきは、上述のような散漫な稀薄化した研究方法に歯止めをかけ、神話の形成過程に確固たる歴史的契機の導入を試みた、三品彰英をはじめとする広畑輔雄、西嶋定生らの中国古典籍に拠る研究である(4)。中でも最も新しくこのヲロチ神話にとり組んだ西嶋は、漢の斬蛇剣説話とその宝器にまつわる性格が、わが国の草薙剣の出現説話をめぐるそれに酷似しているとする三品説を継承し、更に踏み込んで、この草薙剣が皇位の象徴たるレガリアとして定礎意義づけられたのは、自らを漢王朝に擬した天武朝のことであり、それ以後このレガリアを核に聖なる鉄剣出現の説話が上記の斬蛇剣説話を転借翻案して創出されたものと認取し、ヲロチ神話の形成過程をあざやかに論証してみせた(5)。ヲロチの体内から発見される剣を三種の宝器の一翼をなす神璽の剣として、聖なる王権の象徴として仕立て上げるべく、漢の高祖の斬蛇剣型説話をアレンジして、この草薙剣出現伝承は想案され、記紀体系神話内に最終的に位置づけられたとみるすぐれた見解だが、これで問題の全てが解決しえた訳ではない。先述のスサノヲ像に関する根本的な疑義をはじめとして、このヲロチ神話に揺曳する建国神話としての側面がまだ解決すべき重要な命題の一つとして残されているかに思えるからである。

一方、既に上で関説したような認識を示しつつ、三品はその神話全体の構想やその形成過程に、先の西嶋とは別に、鋭い疑問を投げかけている。彼はこのヤマタノヲロチ神話の原初形態を、神と巫女との祭儀を土台とした素朴な神婚神話とみなした上で、(1)このヲロチ神話は、記紀編纂者サイドの添加によるものではないか、(2)このヲロチ退治譚に含まれる神剣要素は、建国神話に不可欠のものであり、記紀神話の最重要のメッセージであったのではないか、かつ(3)アマテラスへの剣の奉献の部分は最終的な添加によるものではないか、という三つの大きな疑点に括り出した(6)。彼特有の素朴単純なものから複雑高度なものへという神話形成の諸段階論はさておき、彼がこの神話を制作者としての大和サイドの新しい造作とみ、そのうちの神剣要素を建国神話とは不可分の必須要素として捉え、建国神話への目配りをはずしていない点で、さすがに鋭い指摘だといわねばならない。ここで以下の分析とも深くかかわるので、早くにハートランドがそのヲロチ神話との類似に気づき引用した、『捜神記』に記された福建省の寄の伝承と、三品がこの草薙剣の出現を語るヲロチ神話に、漢の高祖の斬蛇剣伝承

の投影を認めた当の『漢書』や『史記』の伝承を、三品の紹介文から借りて掲出しておこう。

東越国閩中郡（福建省）庸嶺山の大蛇に土地を荒され、住民は殺される。牛馬を牲にするが効果がない。大蛇は夢や巫祝を通じて十二、三歳の少女を要求する。奴隷、罪人の娘を八月一日の祭に牲にする。毎年繰りかえされ、九人の少女が牲に捧げられる。十年目に李誕の六人娘の一人寄が、親を救うため牲に応ずる。寄は役人に剣と犬とをもらう。所定の日に洞穴に行き蜜団子を供える。蛇がそれを食おうとするとき、犬を放って蛇をかませ、自ら剣をもって斬る。寄は穴から九人の骸骨を探し、もち帰る。越王は寄を妃にし、父母姉にも賞を贈る。以後再び妖怪は現われない。（『搜神記』巻十九）

漢高祖（劉李）が夜、水沢の中を行くと道に大蛇がいたので、剣を抜いてその蛇を両断してしまった。途中で出遇った一老母がいうには、実はその蛇は自分が生んだ白帝の子であるが、今赤帝の子のために斬られたといって哭するのであった。高祖はこのことによって将来天下の主となることを自負した。……爾来、高祖は戦乱の間、あちこちと山沢巌石の間に隠れひそんだが、皇后の呂氏はそれを探し尋ねて常に高祖のところに行った。高祖が不思議に思って尋ねると、高祖の居所の上には常に雲気があるので、それをたよりに尋ねることができたと答えた。この斬蛇剣は長さ七尺、高祖は「自分は平民から身をおこし、三尺の剣をもって天下を取った」といった。（『史記』、『漢書』）

ところで、ヲロチ神話をペルセウス・アンドロメダ型とみなす論者は、松村武雄が要約するように、(1)龍蛇が民衆に災禍を与えること、(2)龍蛇が年毎に犠牲を要求すること、(3)犠牲は常に一人の処女であること、(4)ある勇者が現れ、龍蛇を屠って処女を救うこと、(5)勇者と処女が結婚すること、の五つの話根に一致点を見出している(7)。たしかに先の三品も指摘するように、このペルセウス型ではとりたてて神剣要素が強調されているわけではない。しかも建国や王権のはじまりをとくことが、これ又ことさら普遍的でもない。しかし、英雄ペルセウス＝ペルシャ王に象徴されるように、その初源的形式は建国や王権のはじまりを説くこととかたく結びついたものであったと思える。そして、この種の英雄怪物退治譚にとって、そのヒーローたる勇者がなにゆえに勇者たりうるかといえば、彼の傑出した武力と智力にほかならぬことはいうまでもないであろう。その彼が民衆を災禍から救い、その地の有力な巫女的女性と結婚するとの筋立ては、彼と王権や国家との根源的な結びつきの強さを潜在的に示唆してもいるであろう。ましてや剣が武器としての象徴たりえていた時代、悠遠なる国家の黎明期あるいは、戦闘にあけくれる国家の存亡の危機的状況の中で、一人の勇者と一振りの剣に王権の創始が仮託され、国家の安寧の救世主として聖なる地位が与えられることは、物語られる歴史としてむしろ自然な語りくちだと思える。従って、この種の英雄怪物退治譚を初源的に遡行してゆけば、斬蛇剣と結びついたあの漢の高祖型の「英雄建国神話」へと収斂せざるをえぬことが容易に予測されよう。

以上の研究成果や諸々の指摘認識を勘案すれば、地上の王権の起源を説く、いわゆる出雲神話群の劈頭を担い、スサノヲを主人公として登場するこのヤマタノヲロチの神話が、数多い英雄怪物退治型のうちでもより典型的な「英雄建国神話」の一ヴァリアントであると認定しうると思う。先の松村の話根の列挙にならっていえば、この英雄建国神話は、(a)武力に秀でた英雄と、(b)彼のもちものとしての神剣と、(c)彼による怪物の退治と、(d)救った娘あるいは王女との結婚および、(e)建国ないしは王権のはじまり、という五つからなる主要素を基本的にもっていることが確認できる。この五つの要素の結びつきは極めて緊密であり、ほぼ例外をみないといっていい。この到達点から改めて検討し直してみても、わがヲロチ神話はこれらの諸要素を全てみたしており、英雄建国神話一般とみなしてよい。記紀の筋立てからいっても、外来的英雄スサノヲはヲロチを退治してクシナダ姫と結婚し、葦原中国のいわば始源的な司祭王的地位を占め、後続の本格的な「大国主」へと王位のうけ渡しの役目をはたしているのである。又、三品より転借した先掲の『捜神記』、『漢書』と『史記』からの二話にしても、王が王妃となっていたり、実際に大蛇を殺害する挿話を欠いてはいても、神剣の要素を強く指示しており、王国や王位という国家レヴェルの観念と深く結びついた類話であることが容易に認取できる。

ところで上述した松村武雄のいう五つの話根からなるいわゆる英雄怪物退治譚では、当然のこととして、怪物や妖鬼なるものが退治さるべき対象として主たる要素を占めていた。しかし、ことここに至って、そうした種類の怪物退治譚はむしろ、それを退治する武器としての鉄剣を重要素として具備する、より包括的な英雄建国神話の枠内の一つのヴァリアントとして位置づけられるべきかと思われる。なぜなら、古代王国の黎明期、帝国をめざした戦乱期、そうしたある時期の鉄文化、鉄器・鉄剣要素の重要性を考えあわせれば、それと緊密に結びついた英雄建国神話が文字どおり世界を席捲して流布したであろうその事態は、改めて揚言するまでもない事実と思われるからである。王権や王国の確立後も広がるその種の怪物退治譚は、本格的な英雄建国神話が凋落し、伝説化物語化したものにちがいないと思える。

ところで、わが英雄建国神話といえば、すぐ想起されるのが、列島全体をまきこんで強大な統一国家の形成を説く、あのヤマトタケル伝説である。当然のごとく、このスサノヲ神話とヤマトタケル伝説との類似性がくり返しとかれてきている(8)。次節では、この二神の比較検討をとおして、英雄建国神話の原像を求め、より初源的な神話の様相を明らかにしてゆきたい。

2　英雄建国神話の原像

記紀を代表する、スサノヲのヲロチ退治譚と、それと双璧をなすヤマトタケルの征討武勇譚とが、記紀という史書内に配された位置と、それぞれの物語の背景をなす文化相とに、かなりかけはなれた相違が認められるにもかかわらず、この二つの話が異なる相貌をおびる変容譚であることに、最初に想到したのは誰だったろうか。つとに馬琴か、

江戸期の国学者だかがそれに触れた所説を読んだ記憶もあるのだが、どうにも捜し出せない。これまでも折にふれ、むしかえされてきた議論でもあるのだが、ことにスサノヲに関して近年、どういうわけか心理学的アプローチに格好の素材ででもあるのか、ユング派学者が好んで分析の対象とするところとなり、いろいろとその成果も公表されている(9)。こうした研究に先鞭をつけたデュメジル派神話学者、吉田敦彦はこの二者の間にはホモロジカルな相同性があるとみて、ストーリー展開に即し双方の具体的な類似点を詳細に挙例し、精力的に論じてみせた(10)。この吉田の「スサノヲを完全に裏がえしにして、人間の世界に投射した英雄がヤマトタケルである」というような視点に端的に象徴されるように、彼の比較研究は、心理学的分析をも加味して、表層的なストーリー上にたどりうる、様々な意味レヴェルの類似要素をできるかぎり数多く挙げ、その数の凌駕によって双方の話型の相同性を検証しようとするものである。上で既に批判もしたように、固有の歴史性や文化性を予め無化することで成り立つこの種の比較研究に安易にもたれかかるかぎり、双方の類似点がつぎつぎと並べあげられ、いかに精緻に補強されようとも、説話間の根源的な類似性はみえてはこない。異なる説話間の比較において最も留意さるべきことは、双方の説話型の根幹をなす大枠としての構造性と、その構造性を支える諸要素間の意味と機能との、双方における吻合の精度に基づいて、その相同性が見出されるべきことである。逆にいえば、そうした手続きによらなければ、それぞれの説話型の内に織り込まれている、固有の文化層歴史層の意味あいの相違も、一向に浮き彫りされて出てはこないのだ。比較神話学的方法の有効性は、複数の類似の神話を比較することによって、それらの神話の伝播系統関係を明らかにしうるとともに、厳密な比較検証を通して双方の神話に固有の歴史性文化性を、構造化しつつ表徴化しうる点にある。あらゆる研究が詮じつめれば結局、「時間の学問」にすぎぬとするならば、予め時間を捨消したりあるいは、時間（歴史）のみえてこない研究など研究でありうるはずがないのである。

くどくど批判を述べたててきたが最後にもう一言、上にのべてきたような研究者の通弊として、記紀の説話を比較素材として使うにあたって、記紀の史料批判の欠如という、決定的な弱点がみられることを挙げておきたい。記紀の古典神話においては、そこに結集構成されている諸神話群の体系内へのとり込みに当って、それらが再解釈をうけ、本来的に異なる主人公であるものを統一的な主人公を仕立てあげ、一貫性をもたせていることをはじめとして、大きく変改を加えられていることは周知の事実である。その結果、神話としての原形がそこなわれ、とりわけ固別の神話と神話の接合部分に大きな矛盾点や乱暴な合理化が顕著であるということ位は、記紀にとり組む者の常識に属する事柄であろう。こうしたことからも記紀テクストを研究の対象とするにあたって、予め鉄則とすべきことは、常にウル・テクストを仮想措定し、説話のアルケ・タイプを求めつづける姿勢を貫くことであろう。ことをこの場に引きつけて言えば、属する文化層歴史層にきわだった

性格のちがいを見せる、ヲロチ神話とヤマトタケル伝説とを比較考察の対象とする場合、その原形に対するあくなき追求の姿勢なくしては、そもそも説得力あるラディカルな史的分析などなしえないことを自戒を込めて指摘しておきたい。加えて、表層的な意味レヴェルの比較ではなく、根源的な話型の構造性を支える主要素間の比較検討こそが枢要な作業であることを再確認しておきたい。

さて、ながながと吉田らの研究に批判を加えてきたが、その吉田らのこの二つの説話の類似性に関する考察の集大成ともいうべき数々の論拠を、佐々木隆が箇条書き的に要約して掲出しているので、少々長きにわたるが、これまでの批判点の具体的な挙例を提示する意味と、今後の論の展開に資する意味とを兼ねて、煩をいとわず紹介しておきたい(11)。

(1) 須佐之男は、大蛇を退治することによって櫛名田比売の命を救い、彼女を妻とした。倭建は、妻である弟橘比売によって命を救われ、彼女を失った。櫛名田比売は櫛に変えられ、弟橘比売は死んでから櫛となって岸に打ち上げられた。

(2) 須佐乃男は、大国主をだまして野原の中に入らせ、これを焼き殺そうとした。倭建は、全く同じやり方で焼き殺されそうになった。

(3) 須佐乃男は、体から汚物と意味的にあべこべの美味な物を出す形での饗応を、大気津比売から受けた。倭建は、体から月経の血つまり腐敗した汚物を出している美夜受比売から、その体を提供するという形での饗応を受けた。この時、須佐乃男は汚物でない物を汚物と見なしたために欲望を満たすことができなかったが、倭建は汚物を汚物と見なさなかったために欲望を満たすことができた。

(4) 須佐乃男は、大気津比売の殺害のあとで大蛇と戦って草薙剣を獲得した。倭建は、美夜受比売との交合のあとで同じ剣を彼女のもとに忘れ、伊吹山の神と戦って敗死した。

(5) 須佐乃男は、実際にはいない肉親に執着した。倭建は、実際にいる肉親を殺害した。

(6) 須佐乃男は、男装した天照に迎えられた。倭建は、女装して敵陣へ行った。

(7) 須佐乃男は、天照によって天界から追放されたあと、大蛇退治という武功を立て、それによって得た草薙剣を天照に献上した。倭建は、西征という武功を立てたあと、天照を祭奉する伊勢神宮にいた倭比売から草薙剣を授与された。

(8) 須佐乃男は、生きたまま天上に昇りながら、結局は地下の国に住み着いた。倭建は、死んで地下に葬られながら、結局は鳥に化身して天に昇った。

（I）

日本武尊の東征・結婚と素戔嗚の八岐大蛇退治・結婚は、ともに追放された英雄の、同一の霊剣をめぐる伝承であるばかりでなく、その深層を共有していると考えられないであろうか。いま、この二つの伝承を整理するとき、その関係は次のように把握される。

二つの伝承は、戦争—剣—結婚の要素を互いに逆にたどる関係を持

つ。しかも、それぞれの要素については、闘争（勝利―敗北）、剣（獲得―放棄）、結婚（生産―不毛、長養―別離）というまったく逆の結果がもたらされる。これらに、剣を介しての二英雄の天照大神、倭姫命に対する関係が、献上―授与である点を加えることができる。このような、両者の各要素の転倒、その配置の転倒という対偶的関係は、両者が深層の構造を同じくしていることを意味するのであろう。

素戔嗚尊	
Ⅰ八岐大蛇と闘争	
Ⅱ剣を獲得	
Ⅲ櫛稲田媛と結婚	
	Ⅲ′宮酢媛と結婚
	Ⅱ′剣を遺留
	Ⅰ′伊吹神と闘争
	日本武尊

（Ⅱ）

すでに上で述べたように、こうした類似点をいくら積みあげても、双方の説話の構造的類似が一向に明確にならぬことは、この挙例を一瞥すれば明らかだろう。むしろ、意味レヴェルの限りない類似性の指摘の多さが逆に、構造性の類似の明示を阻んでさえいる。

結論からいうと、この二つの説話に共通する話型とは、くり返し述べてきたように、「英雄建国神話」のそれであって、改めて諸要素を比較対照してみても、英雄・剣・怪物―服従しない敵ないしは荒ぶる神・結婚・始祖王あるいは司祭王―軍事的専制王、と主要素をすべて対応的に共有している。そしてそれら主要素間の微妙な落差によって描出される説話の構造的意味とは、その一つは、いまだ文明に浴さぬ有史以前の自然・未開の状態から文化・文明への移行を体現する司祭王とも始祖王ともあるいは、文化英雄（カルチャーヒーロー）とでも称すべきものの誕生を説きあかす物語としてあった。そしてもう一方は、五世紀という鉄剣が画期をなす時代、それを背景に造型されたヤマトの傑出した王子が、軍備の独占とその確立を挺子に、関東北部以西の列島の全容を領略し、国家の一元的支配を飛躍的にもたらし、歴史上はじめて軍事的専制王権を創出させたことを説く物語としてあった。この英雄ヤマトタケルが五世紀後半の倭王武＝雄略天皇時代の王ないしは王子をモデルにした説話であることは、ほぼ定説化しているといっていい(12)。そしてその時代は、鉄器の独占的所有をめぐって、地域的諸集団の中に経済的軍事的な支配・被支配体制が確立していった歩みと重なっている。さらに五世紀後半、あの巨大な古墳の築造がピークを過ぎる頃、それに代わって東は関東北部から西は南九州まで、多くの古墳に急激に鉄製の甲冑および多くの武装具が副葬埋納されるようになる(13)。そのことは、冊封体制を大きな軸に、大陸文化の輸入とその大いなる波及の影響をうけつつ、諸地域諸首長間の軍事的結びつきが急速に進展したことを象徴的に示していよう。その画期としての雄略朝からしばらく後、こうした歴史的事実の推移を、自らのより近代化された政治的軍事的基盤を確立することによって、冷静に対象化し相対化しうる時

機と位置を得て、英雄ヤマトタケル伝説は造型され形象化されたのである。そうした首長間の政治体制の頂点にたつ軍事的専制王としての大王の成立のモニュメンタルな契機が、倭の五王のうちの武が宋に送った著名な上表文（四七七年）によく示されていよう[14]。

古代のこの列島に実際に、英雄時代があったかなかったかというような問題ではなく[15]、より近代的な文化や国家の成立に不可欠な人為的なるものの象徴として、説話論的に「英雄」なるものがつくり出されるのだ、といいたい。自然を克服し、一元的国家を創始するというような、説明し解決しがたい難問にむきあい、それが克服され、新たに何かが勝ちとられたのだと、その歴史的位置づけを物語をとおして果たそうとする時、不可避的に英雄やスーパーヒーローの存在が喚起され造型される。たとえば、これまで再三のべてきたように、古代という歴史のある段階、おぼろげながら国家としての萌芽が生まれ、体裁がつくろわれるに伴って、ある神格が創り出され、国家をひらくその歴史が彼一人の行為を通していつしか語りつがれる中で、典型的な英雄建国神話がつくり出される。素朴な様式のものであれ、一人の勇者を軸に、建国をめぐる主たる要件が連鎖的に想案され、いろいろな派生的事象をとり込みつつそれら全てが、勇者としての彼の人生に重ね合わされて仮託され、その時代その文化に属する一つの円環をとじる物語が形象化される。彼は建国神としてあるいは、ある氏の神として、久しく崇められ敬まれた前史を有するかも知れない。そして、こうした過程で生み出された一つの様式としての英雄建国神話が、こ

となる文化や歴史の脈絡の中で、微妙な差異をはらみつつ、くり返し応用的に再生産される。それらは類同の様式に根ざす物語であるにもかかわらず、あたかも別の物語であるかのように、様々な時代や文化の異った装いを帯びてたちあらわれてくる。時間をこえ文化をこえた説話の比較研究が可能であるのは、そうした歴史のくり返しや階層化が透視され確証されうる場合に限ってのことなのだ。

ともあれ、一つの英雄建国神話をモデルに、わがスサノヲ神話は、文明のはじまりや祭政とわかちがたく結びついた、プリミティブな国家の興りをとく神話へと遡行的に形象化されることによって生まれ、もう一方のヤマトタケルの物語は、近代的な統一国家のはじまりをとく、より雄大な歴史的神話へと先進的発展的に形象化されるところに生まれた。その二つの神話を共通する一本の神剣によって、相呼応する物語としてつなぎ合わせることによって、本来の説話には全くなかった神剣の発見↓献上↓下賜という筋立てをつくり出し、直接目にはみえないそのバイパスが、三種の宝器（レガリア）の一つとりわけ、国家的軍事力の象徴たる聖なる剣のよって来たる由縁を語り、それを自ら今帯する聖なる王としての君臨をとき、読み手聞き手に直接的にその正当（統）性を説きかけるイデオロギー的装置ともなっているのだ。

くり返し「英雄建国神話」に、そのうちでも「建国」にこだわりつづけてきたのはほかでもない。これに直接関連する「建国神」なる名称が、神話類型の一般的名称としてではなく、具体的な神名は明かさないものの、かつてあった歴史的名称として、『日本書紀』欽明紀十

六（五五五）年二月条に明記されて出てくるのである。そこではこの「建国神」なる神の出てくる経緯を以下のように伝えている。この前年の五五四年、百済の聖明王が新羅戦で戦死をしたとの報を、天皇とともに接した蘇我臣（稲目か？）が、その報をもたらし、今後どのような施策をとるべきか、決心のつきかねる亡き王の王子恵に、助言をする中に出てくる。その助言とは、次のようなものであった。雄略天皇の時代に百済が高句麗に侵略され危殆に頻した時、天皇が救援のためにわが国の「建邦神」を遣して、国家の安寧をえることができた。しかし今はその祭祀をやめてしまっている。もう一度帰って神宮を修理し、その神を丁重にまつれば国家は栄えるだろう、と再びその「建邦神」を百済王に勧請させたというものである。もとより記紀の、日本を故意に優位に立たせようとするこうした類の記事は、十分信にたる事実とはいいがたい。実際にあったことかどうかも定かではない。しかし、山尾幸久もこの記事には疑義をはさみつつも、「五世紀Ⅳ四半期の百済の王権がヤマト王権の後援を求めていた事実、倭王が百済王に優越した地位に立った事実は、否定できない」という(16)。とすれば、五世紀末に、ヤマトの「建邦神」なるものを実際に百済にまつらせたかどうかはさておき、六世紀中頃の欽明朝期には「建邦神」なる神ないしはその概念ができあがっており、その神が雄略朝にかけて語られていることから、その神の五世紀末の実在をかなりの確度で確認しうるその意義は大きい。今日の古代史研究の水準にてらしていえば、先の山尾の言及にもみられるように、中国、朝鮮半島との政治的関係も含めての東アジア史的研究が進み、三世紀来の客観的史実の究明が大いに進展しており、この記事でも雄略朝に結びつけられている点からも、「建邦神」そのものが五世紀後半に既に成立していた可能性は大きい。とすれば、この「建邦神」とは具体的には何という神で、その神ははたして記紀に登場し、そしてその名称が残されているのか、という点に議論が進む。結論からいえば、その神とは、アジスキタカヒコネそのものであったと考えられる。そう着想することによって、このアジスキタカヒコネが記紀で「迦毛大御神」と尊称され、「天照大御神」とも並ぶ格別の扱いをうけているにもかかわらず、それと背反する彼の記紀神話内での宙にういた奇妙な遊離的性格も整合的に理解できる。思うに、アジスキタカヒコネはかつて、英雄建国神話の主人公に託された本来的な建国神でありながら、ある理由からヤマトタケルにその位置をあけわたし、又、別の理由から、スサノヲにその位置を奪いとられ、いわばくり返し換骨奪胎される中で、生命力を失い、孤立した系譜の中に宙づりにされたまま零落をよぎなくされた神格なのだ。記紀のテクスト内でいわば抹殺しようとも無視しようともできた中で、あえて自己矛盾を露呈することを承知の上で、余り意味のない彼の生活史の一部を残存させあるいは、筆録させたのは、彼がかつてヤマトタケルに先だつ建国神の名のもとに、一時期を画する神として、尊崇をあつめ祭祀の対象となっていたことの根づよい伝承の力が、彼を全く無視し去ることを許さなかったのだとも言える。ともあれ次節では、アジスキタカヒコネのそうした往時の神格を、神話的に歴史

的にトレースしつつ、盛衰の歩みを辿り具体的に跡づけ検証してみたい。

（注）

（1）松村武雄「八岐大蛇退治の神話」（『日本神話の研究　第三巻』一九五五年）、大林太良『日本神話の起源』（一九六一年）、このあたりの研究史については、稲岡耕二編『日本神話必携』（一九八二年）に吉井巌の周到な展望がある。

（2）大林太良『日本神話の起源』（前掲）。

（3）関敬吾「八岐の大蛇の系譜と展開」（『日本民族と南方文化』一九六八年）、諸説については福島秋穂「スサノヲ神のヲロチ退治譚について」（『記紀神話伝説の研究』一九八八年）に詳しい。

（4）三品彰英「ヤマタノヲロチ退治」（『建国神話の諸問題』一九六九年）、広畑輔雄「大蛇退治神話」（『記紀神話の研究』一九七七年）、西嶋定生「草薙剣と斬蛇剣」（『江上波夫古稀記念論集　歴史編』一九七七年）。

（5）三品彰英「蛇ノ韓鋤の剣」（前掲書）、西嶋定生「草薙剣と斬蛇剣」（前掲）。

（6）三品彰英「ヤマタノヲロチ退治」（前掲）。

（7）松村武雄「八岐大蛇退治の神話」（前掲）。

（8）吉田敦彦『日本神話の特色』（一九八五年）がまとまった最も新しいもの。

（9）河合隼雄、湯浅泰雄、吉田敦彦『日本神話の思想』（一九八三年）、湯浅泰雄『歴史と神話の心理学』（一九八四年）、林道義『尊と巫女の神話学』（一九九〇年）など。

（10）吉田敦彦『ギリシャ神話と日本神話』（一九七四年）、同『日本神話と印欧神話』（一九七四年）、同『ヤマトタケルと大国主』（一九七九年）同『日本神話の特色』（前掲）。

（11）吉田敦彦『日本神話の特色』（前掲）、森正人「熱田神宮」（『国文学　解釈と鑑賞』一九八二年）、佐々木隆「須佐之男の神話と倭建の伝説」（『文学論藻』61号　東洋大学　一九八七年）、なお、（Ⅰ）は吉田の論を要約した佐々木より、（Ⅱ）は森よりの引用。

（12）山尾幸久『日本古代王権形成史論』（一九八三年）、平野邦雄『大化前代政治過程の研究』（一九八五年）、井上光貞「雄略朝における王権と東アジア」、（『井上光貞著作集　第五巻』一九八六年）、岸俊男「画期としての雄略朝」（『日本古代文物の研究』一九八八年）、佐伯有清編『古代を考える　雄略天皇とその時代』（一九八八年）、などがその代表的なもの。

（13）穴沢咏光・馬目順一「副葬品は語る　㈡武者・武具と馬具」（白石太一郎編『古代を考える　古墳』一九八九年）。

（14）『宋書倭国伝』に「昔より祖禰躬ら甲冑を擐き、山川を跋渉して寧処に遑あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国。王道融泰にして、土を廓き畿を遐にす。……」とある。

（15）高木市之助『吉野の鮎』（一九四一年）、石母田正「古代貴族の英雄時代」（『論集史学』一九四八年）、西郷信綱「英雄叙事詩への道」（『文学』一九四九年）、藤間生大「日本における英雄時代」（『歴史評論』一九五〇年）、北山茂夫「民族の心」（『改造』一九五三年）、石母田正『日本古代国家論　第二部』（一九七三年）、など。

（16）山尾幸久『古代の日朝関係』（一九八九年）。

ほふしやうじ